

### 鎌倉幕府の成立とその支配

1180（治承4）年に始まる治承・寿永の内乱から、1192（建久3）年の源頼朝の征夷大將軍就任に至る過程において、鎌倉幕府は成立した。この間源頼朝は自己の権力を確立するために、内乱の過程では従兄弟の源義仲と対立してこれを滅ぼし、内乱終結後は異母弟の義経・範頼を誅罰するなど、源氏一族間で血なまぐさい権力抗争が繰り返された。1192年に征夷大將軍に叙任され、名実ともに全国を支配する軍事政権の長となった頼朝が、1193年の5月に富士の裾野で行った一大イベントが富士の巻狩であった。この巻狩において、曾我十郎祐成と五郎時致兄弟による仇討ち事件が起こった。「15 曾我兄弟仇討ち事件の謎」は、仇討ち事件の概要を述べ、事件の政治的な背景について諸説を紹介して、『曾我物語』の成立に至る経緯を書いている。

鎌倉幕府は、將軍と御家人の主従関係を基礎に成立した。御家人は莊園・公領の地頭に任命され、地頭は莊園の支配権をめぐってしばしば領主と対立した。「16 遠江の御家人内田氏」は、内田莊を本領とし、承久の乱後には石見国にも所領を得た新補地頭内田氏をとりあげ、分割相続や領家との和与中分の様子、その居館といわれる高田大屋敷の概要について述べ、鎌倉時代の地頭御家人の姿を描いている。

鎌倉幕府の訴訟制度に関して、源頼朝段階の將軍親裁、北条泰時による評定衆の任命とその合議制、1232（貞永元）年の御成敗式目の制定、北条時頼による引付衆の任命と訴訟の迅速化などが指摘される。「17 傀儡の訴訟」は、幕府の訴訟制度の変遷について説明し、東海道宇津谷宿の経営に関与した傀儡と、宿の支配権を得た鎌倉の久遠寿量院との訴訟の様子を概観して、鎌倉幕府の裁判のしくみと実際の訴訟の様子を述べている。

鎌倉幕府が成立すると、京・鎌倉間の往来が盛んとなり、古代の山陽道に代わって東海道が最大の幹線となった。幕府は、東海道の駅制について制度を整えていったが、河川は街道通行の大きな難所であった。「18 絵画が語る富士川の渡し」は、県内の諸河川のうち、紀行文にみられる天竜川・大井川・富士川徒渉の様子を紹介し、富士川については、『一遍上人絵伝』に描かれた舟橋と渡船についてその構造を説明して、蒙古襲来とのかかわりを指摘する説を紹介している。

### 室町幕府の成立と室町時代の国人・莊園の生活

1335（建武2）年中先代の乱をきっかけに、足利尊氏は後醍醐天皇の建武政権から離反し、尊氏討伐のために下向してきた新田義貞の軍を、箱根・竹之下の戦いで撃破した。新田軍を追撃して上洛した尊氏は、北畠顕家に敗れていったん九州に逃れたが、再度上洛した。そして、光明天皇を擁立して建武式目を制定し、幕府の再興を果たした。一方後醍醐天皇は吉野に逃れ、ここに南北朝の動乱が始まった。「19 太平記・梅松論からみた『箱根・竹之下の戦い』」は、箱根・竹之下の戦いを描いた軍記物語『太平記』と『梅松論』の記述を比較し、合戦に参加した武士の軍忠状をもとに、どちらの史料が正確に合戦を描いているかを論じ、合戦の意義について述べている。

室町幕府は京都を本拠としたが、地方機関として鎌倉府や九州探題を設置した。鎌倉府は、足

利尊氏の四男基氏を初代公方とし、関東管領上杉氏がこれを補佐するミニチュア幕府的な政治組織と権限を持ち、後にはしばしば反幕府的な行動をとった。1415（応永22）年に4代公方持氏が関東管領上杉氏憲（禅秀）を更迭したことに端を発して、翌年上杉禅秀の乱が起こった。駿河国は、鎌倉府管轄下の伊豆・甲斐・相模と接する境目の国として、関東の動乱と常に密接なかかわりをもった。「20 将軍と鎌倉公方の対立の狭間で」は、駿東郡の国人領主で、幕府奉公衆として戦国期まで駿東郡に勢力を張った葛山氏と、西相模に進出して小田原を中心に勢力を張った関東公衆大森氏について、上杉禅秀の乱とその後の行動について述べている。

室町時代には、荘園や公領に自治的な村が成立して惣村と称される。惣村を構成する農民は惣百姓とよばれ、惣掟を定め自検断を行った。また、領主に対しては年貢の地下請を行ったり、年貢減免を求めて一揆を結び強訴や逃散をする場合もあった。「21 荘園の人々」は、蒲御厨を舞台に、守護の荘園侵略と領主の対応、守護・荘園領主への百姓の抵抗など、室町時代の荘園をめぐる様々な動きについて史料をもとに語っている。

### 戦国大名の権力、合戦と農民

応仁の乱をきっかけに戦国の争乱が始まり、地方では戦国大名が独自の領国支配を展開した。分国法を制定して領国支配の基本を示し、寄親・寄子制をとって地侍を含めた家臣団の編成を行い、検地の実施と貫高制の採用により家臣に軍役を賦課し、鉱山開発・商業統制・交通制度の整備・城下町の建設などを進めて、領国内にまとまった経済圏を確立しようとした。農村や都市の直接支配をめざす戦国大名に対して、被支配者である村の農民や町の住人は抵抗を試み、あるいは戦乱に巻き込まれぬよう様々な行動をとった。

「22 喧嘩両成敗」では、喧嘩両成敗の法理が室町時代から戦国期にどのように形成されたか、幕府法といくつかの分国法の規定からその形成の過程を位置づけ、「今川仮名目録」で定立された喧嘩両成敗規定の意義について述べている。

「23 今川義元の支配を退けた人々」では、古代に遠江国府が、中世には遠江守護所が置かれた見付の町の発展について概観し、見付の自治にくさびを打ち込もうとした戦国大名今川義元と見付の人々の抵抗、その後見付の自治を骨抜きにした徳川家康と自治の終焉について、一の谷中世墳墓群や見付の祭などを絡めて描いている。

「24 『富士曼荼羅図』の世界」では、富士山本宮浅間大社が所蔵し、狩野元信が制作にかかわったとされる「富士曼荼羅図」を読み解き、平安時代までは仰ぎ見る山だった富士山が、修験道の発達に伴って登る山へと変化したこと、浅間神社の門前には今川氏真から楽市と関所の廃止を認められた六斎市があり、今川氏を滅ぼした武田氏の朱印状からも町としての発展がうかがえることを指摘し、最後に「富士曼荼羅図」の発注主を今川義元とする説を紹介している。

「25 小田原合戦（秀吉の小田原攻め）と農民」では、豊臣秀吉の関東惣無事令に後北条氏が違反して開戦に至った経緯と、秀吉軍による山中城・韮山城攻めの様子を概観し、戦場となった地域の農民たちが、禁制・掟書を入手したり、「小屋入り」して戦乱を避けようとした様を描いて、合戦下における農民の自衛行動について述べている。